

徳山藩の明治維新

徳山藩の明治維新について言及された資料は意外と少ない。ここでは、徳山市史資料編に収録されている「有志詰問録」から、その一端にふれてみたい。「有志詰問録」とはいわゆる「徳山七士」と呼ばれる人たちの取調書の一部である。「徳山七士」と呼ばれる人たちは、児玉次郎彦・本城清・浅見安之丞・江村彦之進・河田佳藏・信田作太夫・井上唯一の七人であるが、「詰問録」には数多くの人物名があげられているから、この七人が中心的役割を果たしていたと考えられる。

さて、徳山藩も本藩同様幕末期には政争が繰り広げられてきたが、元治元年七月一九日の蛤御門の変の敗退と同年八月五、六日の四ヶ国連合艦隊の下関砲撃、

郷土史家 樹下明紀

また幕府による征長が布告されると政局は一変し、佐幕派が藩の主導権を把握するにいたった。徳山藩も例外ではなく、藩の主導権を握っていたのは富山源次郎・本多真・井上珂兵衛・飯田厚藏などの佐幕派であった。このため、彼等七士は富山源次郎などの排斥を企て、暗殺や放火におよんだがごとく失敗した。

彼等突き動かした直接的な理由は、「宗藩京師一条ニ付（蛤御門の変）富山殿申合俗論主張、国家（徳山藩）ノ安危旦夕ニ迫り候ニ付、其儘差置候様難相成」（井上唯一糾問書）というものであり、富山源次郎をはじめとする「俗論政府」の「大罪五ヶ条」を挙げている。煩雑になるが、次に紹介しておきたい。

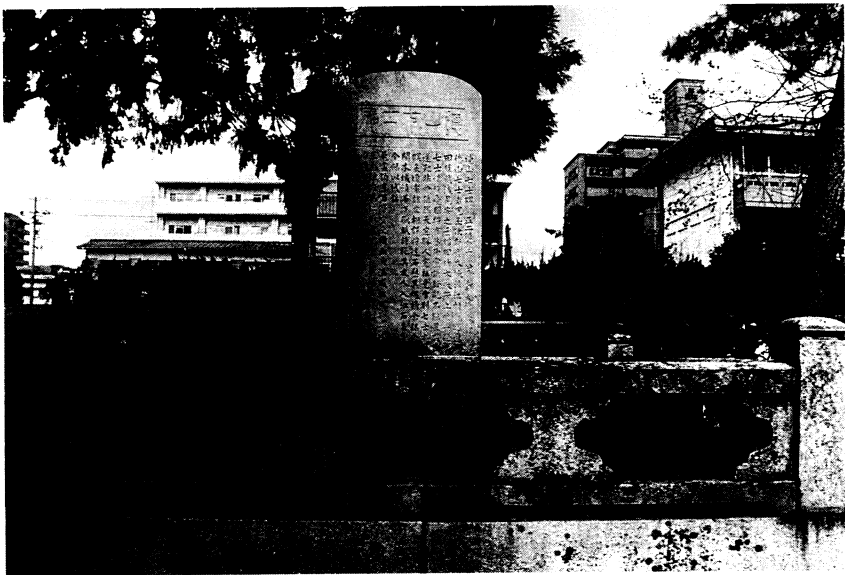
一君上へ阿從シ又身柄へ付属之吏諂媚スルヲ求メ忠義直言スル者ヲ忌妬シ、当時御同役福間一内殿ヲ君寵ヲ頼テ擯斥シ、其外ハ驅使ノ如ク弁ハ直言ヲ塞ニ足ル、是可驚第一也

一君ノ御寵妓幾崎ヲ再ヒ世ニ出シ、君寵ヲ固シテ俗論再興ヲ醸スル宿念アリ、是可驚第二也

一御側御用人本多真殿ニ結謀、井上珂兵衛・飯田厚藏出シ用イ、正義直言ノ士ヲ一時ニ掃除セント謀ラル、是可驚第三也

一性質貪欲無厭之御方ニテ当時御同役又諸役人ノ清廉ヲ惡、何卒賄賂ノ弊風ニ復シ度卜色々奸計を以、去年來君公御英斷ニ而多年ノ弊習御改革被遊候ヲ未タ期年ニモ不成内ニ其御美政ヲハ破候ハ実ニ大奸、君徳ヲ奉汚之國賊也、是可驚第四也

一御本家様此度京都之大変ニ付而ハ、御末家様何國迄も御尽力御周旋可被成之処、其義扨置益田右衛門介殿・福原越後殿・国司信濃殿御預ケ之義さへ御不納得ニテ、如何様御本家様へ御不実相成候而も一切



徳山七士の碑

御懸念ニ無之、唯々因循姑息一日之安を愉マレ候御
心底、実ニ御加判役ニ而有間敷御所作也、是可驚第
五也

この罪状中でも判然とする如く、去年來（文久三年）
徳山藩でも「弊習御改革」にとりかかったが、「期年」
にもならないうちにその「美政」も破れてしまい、改
革の中心人物であった福岡一内が政權から遠ざけられ
たというのである。「第二」の罪状にいたっては、ま
るでテレビドラマを見ているような錯覚すら覚えるも
のである。

富山源次郎暗殺未遂事件のほかに、紙文・万屋半七・
福田屋五兵衛・加賀屋という商人を捕縛したり、大嶋
権四郎という者を斬ったりしている。

このほかにも彼等は奇妙な行動をしていることに注
目したい。それは、無量寺の銅仏をこわしたり、善宗
寺の金灯籠を担いで踊ったり、徳応寺に押し掛けたり、
路傍の石仏は言うに及ばず、寺内の石仏などを倒した
という。

こうした「破仏」行為がなぜおこなわれたのであろ
うか。その答えらしきものが、岩崎謙同の取調書のな
かに見られる。「然ラバ本ノ大略ヲ申述ベントテ、ソ
モく、我伊冊瑛・伊冊諾ニ尊御邦ヲ開キ給シヨリト正
々堂々ト漢語和語取りマシヘ説キ出シ、仏の邪道ナル
事ヲ弁シ、次ニ真宗ノ尤巨害ヲナス事ヲ説ク」とある。
又、渡部新三郎の取調書には、「（足利尊氏ほか）三
將軍木像梟首、足下モ人数ノ内ニ相違ナキ由、依之足
下何レニカ潜伏イタシ候由」という問いに対して、
「決シテ關係不仕候、成程実ハ潜伏イタシ候、是ハ会
津ヨリ私ヲモ人数ノ内ノヤウ疑ヒ候由ニテ、暫潜伏イ
タシ候ヤウ人ニス、メラレ候ニ付」と答えている。

こうした指摘は重要である。「破仏」一件は誰が見
ても国学の影響を強く受けていることは理解できよう。
幕末期、その国学の中でも平田篤胤派の国学が盛行を
見たことは周知の事実である。渡部新三郎が関係した
といわれる足利三將軍梟首事件は、文久三年二月二一
日足利家の菩提寺の等持院から尊氏などの首を持ち去

り、三条大橋の下に晒したことをさしている。ここには罪状書も掲げられており、それを書いた人物をはじめとして関係者のほとんどが平田篤胤門下の人たちであった。萩本藩の人物では大楽源太郎がこの事件に関係したといわれている。このことから一人の人物が想起される。鈴木重胤である。

鈴木重胤は平田篤胤の門人であり、防長両国には多大の影響を与えた人物として知られている。重胤は筑前の宗像神社を信仰しており、宗像神社参詣は安政元年、同五年、万延元年、文久二年の四度におよんでいる。その往復には防長の各地で宿泊し、いろんな人物と交流を重ねている。勿論、これ以前から防長の人士（例えば近藤芳樹や防府天満宮の鈴木高鞆など）と関わりがあったことも事実であるが、注目されるのは重胤の門人に、下関の白石正一郎、小郡の林勇造、防府の岡本三右衛門などがあることである。

重胤と徳山地方の関係も深い。夜市の原田年実、戸田の山田豊頼、道源常吉、四熊宗庵、中村善右衛門、

山田梧山、福田丈之助、渡辺常兵衛、岩崎庄左衛門、国広治郎左衛門などの名前を見ることが出来る。彼等のほとんどは豪農商といわれる人たちである。彼等と徳山藩の志士たちとの接点は不明であるが、例えば、防府の岡本三右衛門と大楽源太郎・久坂玄瑞などとは親交があり、白石正一郎にいたっては膨大な各藩の志士達と交流があったし、本藩最初の「有志隊」である奇兵隊も白石宅で創設されていることが注目される。

当時、徳山では流言飛語が飛び交っていた。「城山や家中に放火の企てがあり、岩崎謙同や山形熊之進が焼弾を学館で作製し、放火の時には富山・本多などが登城するのを提灯の紋を目当てにこれを斬殺し、御蔵本の金銀を取り山口へ罷越すつもりである。本城・児玉・河田の家には各三百金があったという。これは政府の金であり正義といっても、これは大罪である。遠藤春岱が連署を認め、これに福岡一内が刺殺するとおどされてやむなく印判を押ししたと、福岡一内が白状した。河田佳蔵が富山邸に乱入したさい連判状を落とし

ていた。而殿様へ迫って益田右衛門介を主君にする。殿様を退け若殿様を戴き益田を執権とする。この時、渡部新三郎が奇兵隊と連絡をとり、徳山の御城を襲撃する。奇兵隊の宿は、石田順作とする。」などであった。これらの流言飛語は、すべて富山源次郎一派の飯田厚蔵・井上珂兵衛などによって流されたものであった。徳山藩の保守派政権が本藩の奇兵隊を過剰なくらい敵視していたことが知られる。奇兵隊には渡部新三郎・岩崎謙同・松岡修作などが入隊しており、奇兵隊の幹部クラスであり、信田作太夫なども再々奇兵隊を訪れている。(これについては、例えば奇兵隊創設期に狙撃隊の隊長に「片野十郎・岩崎謙同隊長へ相定候事」とあるし、松岡修作も文久三年一月一四日に「砲隊長ニ相定候事」とある。また、信田作太夫の奇兵隊来陣については、文久三年一月一三日、一二月二八日などに「徳山信田作太夫来」などの記事を奇兵隊日記で見ることが出来る。こうした状況が流言飛語を生んだのであろう。)

徳山藩の動向は、萩本藩も憂慮するところであり、文久三年一〇月二五日には瀧弥太郎・高橋貫助・渡部新三郎・松岡修作が徳山藩へ「罷越」している。この中の渡部・松岡は徳山藩士である。瀧・高橋は徳山の世子へ拝謁して、本藩の動向を言上したようであるが、徳山藩の動きに変化はなかったようである。彼等は狙撃隊一伍を率いていた。この後も信田作太夫が奇兵隊の陣営を訪れ(一月一三日・二月二八日)一月一四日には渡部新三郎と共に徳山へ帰っている。翌慶応元年正月、本藩では高杉晋作のクーデターがあり、続いて美祿郡大田絵堂の内戦に勝利すると藩政局は大混乱をきたしている。それを斡旋したのが長府藩主で、内戦に勝利した諸隊の願書で受け入れられるものはこれを受け入れ、前政府員の罪を寛大にして政府員の入替えを断行し、諸隊の追討を中止する意見を出している。この時、徳山世子が萩へ行くように決定したが、これは沙汰やみとなった。その理由を『奇兵隊日記』の二月八日の条に、次のようにある。

徳公御発駕は御止め申置候、何となれば折角長府公へ御委任ニ相成、奮然御周旋之処へ御出ニて、若も議論不合時は事之破るゝ事如見、夫よりは徳山ニて藩中之正邪御黜陟国論確乎たる上、御出萩可なられ可被成候段申遣候、承候得は先年已来入獄之人志田作太夫其外、正義之士悉く病死之由、鳩薬を飲ませし也、実に可悪之奸臣、其君上たる人何そ外事を顧るに暇あらんや

と、かなり手厳しいコメントをしている。

徳山藩の藩論が保守派政権から革新派政権に変わるの、本藩の保守派が処刑され、先に処刑された益田・福原・国司・清水の四家老をはじめとする一人の復権がなされたときと期を一にしている。

さらにもう一つの理由を言えば、この時期徳山藩の改革に本藩から派遣された宍戸備前と前原彦太郎（一誠）の力が大きく与っている。宍戸・前原は六月二三日に徳山へ入り、一四日・一五日の両日徳山藩主毛利淡路守に会っている。宍戸備前の申し入れはかなり強

硬なものであった。それは、まず退役を命じられた富山などの面々が「引込み不仕」政事向きに関わっていないのではないか。「正邪之分凜然」とするためによく勘考しなければならぬ。山崎隊の議論の異動の根源を承知されていますか。正義と思われる側の論を採用され、正義に叶わない論は説諭をされ、家来中が渾和するよう早々手を付けられること。幽囚されている江村純一郎・遠藤春岱を許すこと。もし無理ならば山口表で預かってもいいのですが、しかし徳山藩の「刑典」を妨げないようにします。など七ヶ条におよぶものであった。一六日夜には、福岡一内・森主水・桜井龍右衛門・山崎隊の大野丹下・有福秀太郎・内田五郎などを旅館に招いて議論している。これをうけて一七日には大野丹下などが藩主に迫り、無血クーデターが成功したわけである。

慶応元年六月一六日にいたってようやく徳山藩でも役人の交代が行われはじめた。遠藤春岱・浅見栄二郎・増野友左衛門・江村純一郎・浅見修次・入江弥源太が

先ず許され、一七日、当職に福岡一内と森主水が就任、光井左馬之允・井上佐市・渡部新三郎が許された。また、児玉次郎彦跡・河田健蔵跡・信田作太夫跡・井上唯一跡・本城清跡が断絶していたが、「家筋御取建候」として許された。また、林謹次が家断絶、遠島となっていたが、帰島の上「家筋御取建」が許された。このほか、岩崎謙同・庄原登美衛も「宅帰り之上当分慎懼居候分」と許されている。

一方、富山要人(源次郎)・本多和多利・井上誠兵衛・梅地央・熊谷志登美・水津余一などがおとがめを受けている。しかし、富山・本多・井上の三人も「右押隠居親子兄弟之外相对被差留、於宅先親類預ケ」というものであり、ほかも「遠慮」であった。本藩の佐幕派と比較すれば「寛典」であった。

山崎隊・献功隊の創設

山崎隊は、慶応元年四月一四日に創設された「富田隊」がその基礎となった。この富田隊の「賄方」とし

て政所の岩崎庄左衛門が任命されていることが注目される。岩崎庄左衛門は前述したように鈴木重胤と関係の深かった人物である。また、原田・道源の両家も山崎隊の「賄方」になっている。いずれも鈴木重胤と連なる人物である。岩崎・原田・道源の各家が山崎隊創設にどのような関わり方をしたのか、もっと深い追求がなされる必要がある。例えば、奇兵隊の創設が何故白石正一郎でなされたのか、という問題と同様の疑問を山崎隊の創設に覚えるのである。また、奇兵隊などの「有志隊」創立の背景には下関戦争などにみられるように明白に對外危機意識があった。對外危機意識の中でも殊に開港の影響は豪農商たちに多大の影響を及ぼすことは論をまたない。その中で、安政六年と万延元年に鈴木重胤が江戸の状況を夜市の原田年実親子に知らせている。そこには貿易が「甚国家之大損ニ御座候」と述べているし、「実ニ以外夷之難儀難申尽」とも述べている。鈴木重胤が強烈な尊王攘夷思想をもった国学者であったことを差し引いても、彼に心酔し

ていた豪農商たちの動向を検討する必要がある。

富田隊は、翌一五日には富田新町の浄真寺へ移り、その日の内に山崎隊という隊名がつけられた。その後六月二〇日には徳応寺へ屯所が移されている。

山崎隊は当初から総督に大野丹下が任じている。前述したように、無血クーデターの中心人物の一人は山崎隊の総督大野丹下であった。大野などが一七日に藩主に迫って、本城清などの冤罪を非難し、富山源次郎一派の弾劾をしたのである。山崎隊が政治的にも大きな存在になっていたことを示すできごとである。

この時期、徳山藩には朝気隊・武揚隊・順祥隊・斥候銃隊（慶応二年八月士族で編制され、明治元年献功隊となる）の四隊などは編制されておらず、わずかに徳山藩内各地で農兵隊があったに過ぎない。この農兵隊は慶応元年九月に東衛団・西衛団などに再編成されていくが、この中から技芸が試され上等入りの者は年限中名字帯刀が許された。こうした農兵隊を基盤にして富田隊、山崎隊は創設された。そして、富田にある

山崎八幡宮の名をとって隊名としたのである。さらに、明治元年三月には山崎隊の定員が八〇人増兵され二五〇人に増員されたときも東衛団・西衛団が解兵となり、そこから兵員が送り込まれている。その意味でも士民中の有志の者で編制された山崎隊は注目されるのである。士民中の有志で組織されたということは、当然のことであるがその中に農町民などが含まれているということである。そうした「有志隊」であっても、その性格は本藩の奇兵隊同様藩の正規軍として機能していくのである。

それはともあれ、徳山藩はここにいたってようやく本藩の兵制に準じて改革を行うことが決定され、六月二七日には大庭此面・福井太郎・松浦忠左衛門などが本藩から軍事顧問団として派遣された。（此度御兵制御改御本家御規則江被準度とか御本家御軍制ニ被準などの言葉が資料に見られる）

山崎隊の役付は、百人に総管一人、軍監一人、書記二人、斥候二人、隊長二人、押伍二人の一〇人とされ

た。

規則も制定された。例えば、一日の日課は次の通りである。「朝六ツ時から五ツ時迄調練（但雨天の時は講堂で温読）、五ツ時頃喫飯、五ツ半時迄休憩、五ツ半時から九ツ時迄諸武芸執業、九ツ時喫飯、暮六ツ時迄休憩、暮六ツ時より五ツ時迄書見」となっている。

このほか「一・六の日は夕八ツ時から七ツ時迄教練書会業、四・九の日は八ツ時から七ツ時迄兵書会業、五・一〇の日休日」であった。

さて、山崎隊は最終的には明治二年に遠く函館まで出征し、同三年には脱退兵討伐のため、防府右田などで激戦を展開している。その過程で戦死者も出している。しかし、明治維新は確実に風化しつつあり、この徳山でも忘れ去られようとしている。よりよい未来を指向するためにも、今日の原点となった明治維新をもう一度振り返って見る必要があると私は思っている。

（本稿、平成一二年五月二〇日に徳山郷土史会特別講演会の講演要旨に少し加筆訂正したものである）



山崎隊士の墓（永源山）